九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「未来を拓く子どもの社会教育」 上杉孝實・小林美代子 監修

正平, 辰男
東和大学総合教育センター

https://doi.org/10.15017/19997

出版情報：生活体験学習研究. 10, pp.89-90, 2010-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第10号　89－90（2010）

「未来を拓く子どもの社会教育」

上杉孝實・小林美代子監修

標記の著書が日本生活体験学習学会に献本され紹介の依頼があったので、本書の概要を紹介する。「まえがき」によれば、本書は社会教育全国協議会が主催する社会教育研究全国集会「子ども分科会」の第14回名古屋集会から第48回札幌集会までの35回に及ぶ実践報告と研究討議の成果ともいうべきものである。本書の構成は、プロローグ「子どもの発達支援と権利保障」、第Ⅰ部「子どもが育つ地域と社会教育」、第Ⅱ部「子どもの豊かな育ちと文化・家族・社会教育」、エピローグ「子どもが豊かに育つまちづくりをめざして－子どもの権利施策の創造」である。第Ⅰ部は、上杉孝實、第Ⅱ部は小林美代子が執筆し、かつ二人が関係する研究者、実践者、施設職員が分担執筆している。プロローグは立柳聡が、エピローグは姥貝荘一が執筆している。第Ⅰ部「子どもが育つ地域と社会教育」では上杉孝實が、論考「子どもの社会教育の展開」を、柳父立一が論考「少子化の原因としての子ども観－『勉学的子ども観への移行』－」を書いている。

続けて８名が次の事例報告や論考を執筆している。

森澤範子　子どもの人権を守る活動―川西市子どもの人権オンブズパーソンの活動から―、兵庫県川西市における公的第三者機関の活動報告である。

立石麻衣子　自然のなかでの子どもの活動～一人ひとりの存在を認める「ひと山まるごとプレイパーク」―、大阪府池田市の特定非営利活動法人北摂こども文化協会の実践である。

江坂正己　論考「子育ち・子育ての今日的課題　―地としての関係／図としての発達―」

佐野万里子　子育ち・子育てと公民館―「なんなん？おもしろ体験隊」から―　財団法人奈良市生涯学習財団南部公民館と特定非営利活動法人都南地域教育振興会（はーとネット）の小学生対象協働事業の実践である。

山田隆造　子ども博物館（チルドレンズミュージアム）の可能性―キッズプラザ大阪の事例―、財団法人大阪市教育振興公社が運営する「こどものための博物館」の実践である。

水野篤夫　論考「子ども・若者と社会教育：今求められるユースサービス」

大場孝弘　子どもを支える青少年施設、京都市にある公設民営の青少年活動センター（財団法人京都市ユースサービス協会）の十年の活動を整理している。

宮村裕子　大学生ボランティアによるコミュニティスペースの運営、大阪府柏原市のコミュニティースペース peco（ペコ）の実践である。

第Ⅱ部「子どもの豊かな育ちと文化・家族・社会教育」では、小木美代子が論考「子どもの時系列的発達保障と家族、文化、社会教育―『自立した人間』を育てるから、『自立した個人』を育てる時代へ―」を、志濃原亜美が、論考「現代家族と子育ち支援」を執筆している。続けて７名が次の事例報告や論考を執筆している。

掃部陽子　家族カウンセリングによる子育ち・子育て支援―家族カウンセリング研究所“陽だまり”―福島県福島市に開設した同研究所の２年余の実践である。

廣中邦充　みんな おじさん ところ に おいで　―やんちゃ和尚・西居院―　愛知県岡崎市のかけこみ寺西居院で、常時十数人の子どもを預かり、生活をともにしている「やんちゃ和尚・廣中邦充」の実践である。

星野一人　論考「転機を迎えた地域子ども施設―『共同性』の再構築をめざして―」

田島克哉　廃校活用の子ども総合施設の活動風景―港区立赤坂子ども中高生プラザ（愛称“プラザ赤坂なんで～も”）　高齢者施設と児童施設の複合施設という形態をとる同プラザの実態と課題をまとめている。

高見啓一・小林理恵　地域オリジナルの通学合宿が育む、子どもとおとなの自己形成
滋賀県「びわ町」（現長浜市）の通学合宿と米原市立米原公民館の通学合宿の実践をまとめている。「びわ町」は同教育委員会と「びわ町地域教育力体験活動推進協議会」が主催している。米原公民館は特定非営利活動法人 FIELD が指定管理者である。

山田真理子　論考「子どもの育ちとメディア文化」子どものメディア漬けの危機を指摘して、ノーテレビデーの実施とノーテレビに向けて家庭で取り組める具体策を提言している。資料として、「子どもとメディア」の問題に対する提言（日本小児科医「子どもとメディア」対策委員会）が紹介されている。

西村たか子　「おやこ劇場」が果たしてきた役割と今後の展望―NPO 法人横浜こどものひろば―30年間に350以上の作品を上演して舞台芸術にふれる機会を提供してきた実践をまとめ、今後の課題と展望を示している。

第Ⅰ部で上杉孝實（たかみち）は、論考「子どもの社会教育の展開」において、以下の７項目を立てて論じている。１．社会教育の概念をめぐる問題、２．子どもと社会教育行政、３．子育ち、子育てと社会教育、４．子どもにとっての社会教育、５．子ども観の問題、６．子どもの居場所と社会教育、７．子どもの社会教育実践の課題、である。

第Ⅱ部で小林美代子は、論考「子どもの時系列的発達保障と家族、文化、社会教育―『自立した人間』を育てるから、『自立した個人』を育てる時代へ―」において、以下の６項目を立てて論じている。１．子どもの育ちの現状と子育ち指標転換の必要性、２．子どもの発達的特性の理解と家庭・地域、３．児童期の発達的特徴と家庭・地域、４．児童期後期と家庭・地域、５．青年期の発達的特性と家庭・地域、６．子どもの時系列発達の進行と家庭・地域のかかわり方、である。

本書は、子どもの社会教育研究をより深化させていくために出版されたものであるとして、「まえがき」には次のように書かれている。子どもの教育問題についての書物は数多く出版されているけれども、それは学校教育に関するものが主であり、子どもの社会教育に関する書物はあまり見あたらない。そこで、大学・短期大学などで社会教育や保育等の講座を担当している教員、行政や NPO といった機関・団体で実践・研究をすすめている方々に依頼して分担執筆してもらった。「まえがき」に書かれている通り、社会教育に関する書物自体が学校教育に比べると少ないが、それは小・中・高校で働く教員の数を考えれば当然のことではある。しかし、それはおいても「社会教育と子ども」というくくりで書物を探すとなると大変少ない。さらに、「公民館と子ども」というように限定すれば探すこと自体が困難とさえ言える。その意味では、本書は都道府県、市町村の社会教育の第一線に立っておられる社会教育主事の皆さんに読んでいただくようお勧めしたい内容である。社会教育主事のみならず、小・中・高の各学校で地域との連携を実践しておられる教員の皆さんにもお勧めしたい。上杉孝實（たかみち）は、論考「子どもの社会教育の展開」の中で次のように述べている。「家族、同輩集団、近隣集団、学校、職業集団などが通過集団として子どもの社会化に大きな影響を与えることが指摘されてきました。（略）かつての家庭の教育機能が高かったかのような言説がありますが、（略）むしろ家族の教育機能は、自営業家庭などで見られた親子の共同労働によって発揮されたといえます。孤立した小規模家族では、親の育児不安も増し、子どもの人間関係も限られてきます。家族を支える上でも、子どもの社会性を育てる上でも、身近な同輩集団、近隣集団の機能が重要です。これらが自生的に成立しにくい状況にあるとき、意図的にその形成をはかるところに社会教育の機能があります。」（32頁）社会教育実践の場に身をおく人々が上杉のこの指摘を反芻しながら、本書に書かれている事例や論考を読み返すならば、新たな刺激を得ることもできるし、実践意欲を高めることもできるだろう。

[学文社、2009年、3,150円]

（正平辰男）